

カンキツ新品種 ‘佐賀果試34号’ の特性

中村典義・八田 聡・松尾洋一¹⁾・大原有美子・末次信行
(佐賀県果樹試験場・¹⁾佐賀県農業試験研究センター)Noriyoshi Nakamura, Satoshi Yatsuda, Youichi Matsuo, Yumiko Oohara and Nobuyuki Suetsugu :
Characters of New Citrus Cultivar ‘Sagakashi No.34’

近年、価格が低迷している‘温州みかん’にかわり、高糖度で食味がよい‘不知火’の栽培面積が県内でも200ha (2002年)と増加している。しかし、樹勢低下による減酸不良および小玉化等が産地で問題になっている。

そこで、佐賀県果樹試験場では、樹勢が強く、減酸が早く、果実が大きい新品種の育成を目的に、‘不知火’の珠心胚実生による品種開発を行ってきた。その結果、育種目標に適った‘佐賀果試34号’を選抜・育成したので、その育成経過と特性概要について報告する。

1. 育成経過

1996年に‘不知火’を種子親に‘紅甘夏’の花粉を交配し得られた種子506個を、外種皮および内種皮を剥皮した。シャーレに播種し発芽させ、プランターに鉢上げし育成した。この幼苗を無加温のガラス温室内で育成し、高接ぎ用の穂木が採取できるまで1本仕立てで誘引・伸長させた。そのうち生育の良い248個体の実生苗を1998～1999年に無加温ハウス内の7年生‘青島温州’を中間台として高接ぎを行った。高接ぎ後、ビニル被覆をして温度を上げ、生育を促進させた。2000年より結実を開始したので、ハウスの被覆を除去し、露地と同じ条件で、果実の特性調査および個体選抜を開始した。

2002年に、‘不知火’と比較して、安定して、樹勢が強く、減酸が早く、果実が大きい形質を持つ1系統を

‘佐賀果試34号’として選抜した。本品種は、2003年3月に品種登録を申請し、同年11月に品種登録出願が公表された。

2. 特性の概要

樹勢は‘不知火’より強い。樹姿は中間で樹の大きさは中である(第1表)。枝梢の長さは長い。葉身長および葉身幅は‘不知火’より長く、葉形指数は‘不知火’よりかなり小さい。葉身の形は紡錘形である。トゲは幼苗時には発生するが、結実時には無くなる。花は単生有葉花が中心となる。かいはよう病やそうか病については、通常の管理作業を行っていれば問題はない。

果実の重さは320g強で‘不知火’より重く、果形指数は88程度で‘不知火’より小さい(第2表)。果皮色は橙色で、果皮の粗滑は中であり、剥皮性は中程度である。果肉歩合は‘不知火’とほぼ同等である。さじょうの大きさは中で、果汁は多く、じょうのう膜は薄い。香りについては‘不知火’の芳香がある。酸味は‘不知火’より低く、成熟期が‘不知火’より早く、酸含量は1月中下旬に1%よりも低下する。果汁の糖度(Brix)は1月中旬で12.5以上と安定して高く、食味は良好である。隔年結果性は‘不知火’より低い。

これらのことより、本品種は1月中下旬頃に出荷が可能な中晩生カンキツ品種と位置づけることができる。

第1表 カンキツ新品種 ‘佐賀果試34号’ の樹体および果実特性

項目	佐賀果試34号	不知火	項目	佐賀果試34号	不知火
樹勢	強	中	果形指数	かなり小	やや小
葉身長・葉身幅	中	短・狭	果皮歩合	中	中
葉形指数	極小	中	酸味	低い	中
トゲの多少	無	無	成熟期	かなり早	やや早
果実重	かなり重	重	隔年結果性	小	中

第2表 カンキツ新品種 ‘佐賀果試34号’ の果実品質 (2000～2004年の平均データ)

品種・系統	横径 (mm)	果形指数	平均果重 (g)	果肉歩合	着色歩合	果皮色 a)	糖度 (Brix)	クエン酸含量	糖酸比	調査日
佐賀果試34号	88.0	96	324.0	75.1	10	6.9	12.9	0.99	13.0	1 / 20
不知火	87.0	100	293.6	76.1	10	7.3	12.3	1.17	10.5	1 / 20

注) a) 旧農林水産省果樹試験場作成のカラーチャートによる。